

ポーランドにおける音楽専門教育の一考察

大 橋 博

日本の人口は約一億、ポーランドの人口はその三分の一の約三千万。そのポーランド国内に国立音楽小学校が三百校ある。これを日本に当てはめてみると、各県に二十校の音楽小学校がなければならないことになる。

ポーランドの小学校は八年制ではあるが、日本の小学校、中学校が義務教育である事を思えば、それに等しい義務教育が行われていると思えばよい。

いろいろな可能性を持っている子供達に、幼児の時から、音楽とバレエを専門的に教育することは、洋の東西を問わず行われているが、義務教育機関の中にとり入れられている国は、ポーランド以外に私は知らない。ソ連に於ても、音楽小学校は音楽高等学院の附属として、勿論国立で設けられてはいるが、その数に於て、組織に於て、ポーランドの比ではない。

何故その様な徹底した制度を施行したのか。強国ソ連とドイツに挟まれた小国の独自の生き方が、その様に現われたのか。それとも、同じ共産圏であるソ連の感化によるものか。又、歴史的にポーランド国民の芸術性がそれを生み出したのか。私は、それを追求する時間も無く帰国した事を残念に思っている。

先ず、私の訪れた学校、及び其の他の機関を列挙し、次いで所見を述べたいと思う。

国立音楽小学校

ワルシャワ国立高等音楽院

国立バレエ小学校

ワルシャワ地区教育指導センター

ポーランド作曲家協会

他、オペラ、コンサート、ポーランド民族舞踊、ショパン協会、及びショパンの生家

国立音楽小学校は、三回の訪問で、私の見学した時間は、合唱練習、ピアノのレッスン、ヴァイオリンのレッスン、楽典、リトミック、楽式、ソルフェージュなど。ワルシャワ国立高等音楽学院ではソルフェージュ及び放送電気科の設備見学。バレエ小学校ではバレエのレッスンと音楽鑑賞。ワルシャワ地区教育指導センターでは、音楽指導主事に会い、普通教育に於ける音楽の内容とそれに関係する教師及び時間等についての話し合い。ポーランド作曲家協会に於ては、作曲家バイルド氏とドプロヴォルスキー氏との懇談。其の他、ゼラゾヴォーラにあるショ

パンの生家、演奏会など一つ一つを挙げて、これに対する考察を述べるよりは、全体を通じて、ポーランドに於ける二週間の感想として報告したいと思う。

小学校の子供達は、未だ弾痕のある校舎で授業を受けている者もあるが、休憩時間にはテニスのラケットをギターがわりにして、ビートルズの真似をして遊んでいる者もあり、日本の子供達と何等異ったところはない。

私達が参観のため校長に案内されて教室に入って行っても、子供らしい好奇心の様子を見せはするが、それとて、日本の子供に見られるものだ。音に対する感覚及び理解の程度にしても、相愛学園の子供の音楽教室に来ている子供達と比べて、高くもなければ低くもない。しかし私は、それぞれの授業時間が、真面目に熱心にしかも楽しく行われていたことを印象づけられた。それはおそらく、教師の態度によるものではないかと思う。三百の小学校の卒業生のうち、その三分の一がリツェムに行き、更に選ばれて七つのコンセルバトアールを経て音楽教師となっている彼等教師の質と職業に対する誇りが、自分の担当している授業に現われているのだと思う。ミヨドバの音楽小学校に於ける四年生のソルフェージュの時間の内容を一例として挙げる。

教師は大学を卒業したばかりと思える若い女の先生。生徒は15名で内4名が男子

- 1 イ、音階を弾いて長音階か短音階か。
ロ、短音階なら自然的か和声的か旋律的か。
- 2 イ、イ音を与えて短調の三種の音階を唱う。
ロ、二部にして三度の間隔での音階歌唱練習。
- 3 a moll の主要三和音の分散歌唱練習。
- 4 二つの音を弾いてその間隔は何度か。
- 5 曲を弾きその旋律がもっているリズムの書き取り。
- 6 新曲視唱。
- 7 旋律書き取り。

以上のものを一時間で授業していた。ソルフェージュの時間であるから、正しい音を取り、それらが唱えることの訓練は当然であるが、この時間だけから考えても、楽典とソルフェージュが共通の場に於て学習されていることが解る。他に、ピアノのレッスンに於て或る教師は、「どの様に音の流れがあるかを教えるのがレッスンだ」と言っていた。又、それに付け加えて、「楽譜に書かれている音をピアノに再現するメカニックは、自分の家で5時間でも6時間でもかけて練習すれば出来る」と。言いかえると、「文字の読み方ではなく文章の読み方を教えることがレッスンだ」ということである。

美しい音を出し、むずかしい曲を巧みに弾くことに於ては、我々日本人の仲間はずでに世界のコンクールの上位を占めるほどにまでなっている。日本人は大変すばらしい国民だと、世界の人々は注目し始めている。音楽ばかりではなく、他の芸術に於て、学問の分野に於て

も。それほどすばらしい日本人である我々に次に残されている勉強は、模倣、再現の域に止まらず、「創造」と「訴えの力の強さ」をつけることではないだろうか。世界各国は、それぞれ伝統の文化を持ち、それらが交流されて世界的なものにまで発達している。日本は、周囲海にとざされ、又、文字がローマ字でなく、その為交流の時期がヨーロッパの国々に比べて遅れていた。しかし現在は、海も、文字も、それらが交流の障害になる程のものではない程、文化は発達している。我々が育った伝統の中から、世界的な音楽が生まれる日もそう遠い未来のことではないと思う。

次に、ポーランド作曲家協会で懇談したことを中心として、ポーランドの若い作曲家達がどのような過程で世に出て来るかを述べることにする。

ポーランドの青年達が作曲を学ぶ場所は、大体国内にある七つのコンセルバトアールの作曲科に限られる。だから、彼等が世に出る第一歩は、卒業生の為のコンクールとなる。そして、それ以外に他国でも同じ様に放送局主催のコンクール、地方都市に於けるいろいろの音楽祭のコンクールなど。これらは、他国と比べて特にどうということはないが、共産主義国であるので、全ての団体、機関が国の支配下にあり、殆んど経費が国によって支払われているため若い人達の発表の可能性は他国よりは多い。例えば、

文部省（文化芸術省）内に、若い人達に金を与え、又、若い人達のスタートを助けるための委員会がある。音楽教育は前述の通り、小学校から大学まで国営で無料。放送局及び各演奏団体では、彼等が演奏にとり上げる曲はすべて国の金で楽譜が作られ、演奏にかけられる。最近では、有能な若い指揮者が多く、又彼等は常に、積極的に新人の曲をとり上げている。ポーランド作曲家協会のメンバー 150 名は新人の紹介に積極的である。

以上の現状から理解されると思う。しかし、上に述べた様に、これらの経費が国の金でなされるとはいえ、すべての音楽家が優遇されているわけではなく、作曲家協会員 150 名中、純作品のみで生活出来る人は 6 名から 10 名までだとのことである。

衣、食、住すべて不自由な国の中で、音楽をはじめとして芸術の世界が此の様な形で育てられているポーランドという国に、敬意をはらってペンをおく。